'87.6

児童文学

最首悟

児童文学は倒錯で成立している

緊張した危うさの上に成立

安房直子「べにばらホテルのお客」

自家撞着を核に

すでにお気づきのことと思われるが、児童文学というジャンルについて、あるささいな、あたりまえのことを言おうとしている。あたりまえだけれど隠れているというか、ほじくらないほうが教育面や商業主義にとっては無難といったことである。それは端的にいって、児童文学は倒錯によって成り立っているということである。

ゴーリキーの評論に「わたしもまた幼児でありました」、しかし「われわれは疲れて、死んでゆきます。彼ら（子どもたち）はわれわれの場所で、新しいあざやかな火のように燃えつつあります。彼らがおればこそ生活創造の炎は消えないのです。だから、わたしはこう申しあげたい――子どもは不死である！」（『児童文学と教育』）という箇所がある。

ゴーリキーはここで、人間の苦しみやいたらなさも「子どもたちに率直に物語る」ことに児童文学を方向づけようとしているのであるが、同時に、はしなくも児童文学の本質を言い当てているのである。

「私も子どもだった―私は疲れ死ぬ―子どもは不死である」にもかかわらず、私は子どもを守り導き育てねばならず、にもかかわらず私は子どもにかえり、子どもの不死に身を溶け込ましたい。言い換えれば、私は〈子ども〉を〈ゆきてかえらぬ存在〉＝〈おとな〉になるのに大いにかかわるのに、私は〈子ども〉の永遠性に身を浸していたいのだ。

児童文学はこのような自家撞着を核にしている。そして児童文学の傑作は、この自家撞着の深みにおいて生れるのである。当然にもそれを必要とし、楽しむのは大人であり、しかもあくまで読者は子どもであるという枠組みをくずしてはいけない。児童文学は倒錯で成り立っているゆえんである。それも何重か何層かの倒錯であろう。

児童文学はアングロサクソンにかぎるということのなかには、文化における倒錯一般の必要性、あるいは消化の仕方という問題がはらまれているのかもしれない。

児童文学の傑作とは、結局は多数の子どもに読みつがれてきたものをさす、ということに異論をとなえているわけではない。子どもが児童文学を読むことはさけられない。子どもが好きな本は当然出てくるだろう。しかし子どもがなぜその本を好むか、私たちは知らないのである。好むわけをもし私たちが言い切ってしまったら、そこで子どもの不死性、すなわち絶対性、不可解性、神秘性、由づり性は消滅してしまい、したがって大人は児童文学を書かなくなってしまうだろうし、読まなくなってしまうだろう。

「だいたいわたしという子供は、生れつきよほど想像力に欠けてでもいたのか、幼少期の読書の感激的な思い出というものがいたって乏しい。ほとんど皆無といってしまっていいほどだ」と矢川澄子が書く（『わたしのメルヘン散歩』ちくま文庫）。こういう文章に出会うとなんだかホッとする。大人になって急に想像力が豊かになるのもおかしいのだから、彼女はここで断絶をいっているのである。

何が〝勇気〟なのか

奥田継夫の性の三部作完結の『この心さわぐ冒険、愛』（ほるぷ創作文庫、一九八七年五月、一二〇〇円）が出た。新制中学一期生の、相思相愛の夏子と鐘男が大学生（浪人）となって、ホテルで〈契る〉ところまで。あとがきで、奥田は、さいごに、あえて児童文学として出版した、ほるぷ出版の勇気に感謝する」と述べている。

この作品は透明にストレートである。児童文学の、大人が必要としている本ではない。あきらかに文学一般の作品であって、読者を限定しない。だからなにが勇気なのかとまどう。児童文学では、性（交渉）の具体的描写はタブーであるという観方なら、挑戦ということになるが、そういうタブーはない。ただそういう尋常な場面設定がプロットとして出てこないというだけの話だ。

たとえば矢川澄子の『……散歩』の中「妹背を契るもの――宮沢賢治」は、妹トシの死んだ日に書かれた「永訣の朝」をとりあげる。この日本における「最も悲痛なひびきにみちた」そして「はりつめた美しさ」において他の追随を許さぬ「男女相聞歌」にみられる世界がなかったら、賢治の幻想界への旅立ちはなかったろうと矢川はいう。

兄妹愛は真の合体をのぞんで成就せず、純粋な宙づりの愛になる。互いの愛の成長をねがって、ねがった分だけ悲劇性を増していく。

魂のうめきを表現

安房直子の『べにばらホテルのお客』（筑摩書房、一九八七年五月、一二〇〇円）も同様の緊張した危うさの上に成立している。

安房　直子氏

ムネアカドリと結婚したトランペット吹きの死を背景にして、新人賞受賞童話作家が、自分が創造しかけている主人公青年をめぐってキツネとはりあい、「およめさんコンクール」をすることになってしまう。

勝負は最初からついているのだ。全身全霊をこめた真摯なキツネの愛に、自分で創りだした青年に自分が恋をしようとする人間が勝てるわけはないのだ。

兄妹愛の進展がある段階でせきとめられて、昇華していくほかない、そのエネルギーの爆発回避のありかたは、トリと人間、ケモノと人間の愛の場合、はるかにむずかしく危ないものになっていく。それをくぐりぬけたとき、愛は宇宙大の普遍性を獲得する。はたしてくぐりぬけられるのか。

児童文学は倒錯している。尋常なプロットで、かつ愛のしあわせな結末、その具体的な描写などで、読者の期待、需要にこたえることはできない。奥田継夫の作品は健全そのものである。安房直子のそれは倒錯にみちている。しかしどちらが倫理の極限をさまよい、魂のうめきを表現しているか、それによって児童文学作家であるかどうかが決まるのである。そして、そういう意味で、社会的に児童文学作家と呼ばれることは、ほんとうはあまり安全なことではない。（さいしゅ・さとる氏＝東京大学助手・生物学専攻）